

庄屋田遺跡発掘調査報告

2004(平成16)年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県のほぼ中央西部に位置します一志郡美杉村は、伊勢平野を東流して伊勢湾に注ぐ清流・雲出川の上流にあります。雲出川流域は伊勢と大和・伊賀を結ぶ文化交流のルートの一つにあたり、古来より高い文化を形成してきました。

今回発掘調査を行ないました庄屋田遺跡は、一志郡美杉村八知字庄屋田に位置し、雲出川左岸の河岸段丘上に立地する遺跡です。平成14年度主要地方道久居美杉線道路改良工事（須渕B.P.）に伴い、遺跡が現状変更される部分について記録保存を図ることになりました。調査では、縄文時代から中世までの貴重な成果が得られました。特に、八知ではこれまで知られていなかった古墳時代の遺構を確認しました。今回得られた成果が三重県の歴史研究の一助になるとともに、祖先の残した貴重な文化財として、美杉村における郷土の歴史や文化として伝え、活用されることができれば幸いです。

調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、美杉村教育委員会、県土整備部・津地方県民局久居建設部などの関係機関から多大な御協力と御理解を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心から御礼を申し上げます。

2004年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例　　言

1 本書は、三重県一志郡美杉村八知字庄屋田に所在する庄屋田（しょうやだ）遺跡発掘調査にかかる報告書である。

2 本遺跡の調査は平成14年度主要地方道久居美杉線道路改良工事（須潤B P）に伴い、三重県教育委員会が三重県県土整備部から経費の執行委任を受けて実施した。

3 平成14年度調査および整理は次の体制により実施した。

　調査主体　　三重県教育委員会

　調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

　企画調整グループ　　主査　森山直樹

　調査研究グループ　　主事　辻本泰宏

　臨時技術補助員　小林俊之

　発掘作業委託　（株）イビソク

　調査期間　　平成14年6月25日～8月1日

　調査面積　　700m²

4 調査にあたっては、地元の方々をはじめ、三重県県土整備部道路整備課、津地方県民局久居建設部、美杉村教育委員会、美杉村社会福祉協議会からの協力を得た。

5 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究グループおよび情報普及グループが行なった。また本文の執筆はⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴを小林俊之が、Ⅱを辻本泰宏が行なった。なお、写真撮影・全体の編集は辻本泰宏・小林俊之が行なった。

6 現地の調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々から有益な御教示を受けた。（順不同・敬称略）

　石瀬誠人（美杉村教育委員会）、伊藤裕作・小瀧学（斎宮歴史博物館）、新田剛・林和範（鈴鹿市考古博物館）

7 本書の座標・方位は、日本測地系による国土調査法（旧国土地標）の第VI座標系を基準とする座標北を用いた。なお、世界測地系（I T R F、G R S - 8 0）には対応していない。

8 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。なお、写真図版は縮尺不同である。

9 本報告書での用語は、以下のとおり統一した。

　わん………「椀」「碗」「塊」があるが、「椀」を用いた。

　つき………「杯」「坏」があるが、「杯」を用いた。

10 本報告書での遺構番号は通番となっている。また番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

　S K : 土坑　　pit : ピット・柱穴

11 当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

I	前言	(小林俊之)	1
II	位置と環境	(辻本泰宏)	3
III	調査の成果～層位と遺構～	(小林俊之)	5
IV	調査の成果～出土遺物～	(小林俊之)	10
V	調査のまとめ	(小林俊之)	14

図 版 目 次

図1	事業地内調査区位置図	図7	S K 2 平面図・断面図
図2	遺跡位置図	図8	S K 3 平面図・断面図
図3	調査区西壁・北壁土層断面図	図9	S K 4 平面図・断面図
図4	調査区東壁・南壁土層断面図	図10	出土遺物実測図①〔縄文時代〕
図5	遺構平面図	図11	出土遺物実測図②〔弥生時代以降〕
図6	S K 1 平面図・断面図	図12	美杉村の山茶椀・瓦器の分布

写 真 図 版

1	調査区全景（北から）	5	出土遺物②（縄文土器）
	調査区全景（南から）	6	出土遺物③
2	S K 1（東から）		出土遺物④（弥生土器・須恵器）
	S K 2（南東から）		出土遺物⑤
3	S K 3（北西から）		出土遺物⑥
	S K 4（北から）		出土遺物⑦（山茶椀・瓦器）
4	出土遺物①（磨石）		

表 目 次

表1	遺構一覧表	表4	出土遺物観察表
表2	縄文土器観察表	表5	庄屋田遺跡の土器構成
表3	石器観察表		

I 前 言

1 調査に至る契機

主要地方道久居美杉線は久居市と美杉村を結ぶ県道で、一志郡各市町村とのつながりが大きい同村にとっては村有数の主要幹線である。その中の美杉村掛ノ脇一庄屋出間は険しい谷地を走るため、雨量により通行止になることもしばしばあった。そこで掛けノ脇一庄屋出間にはバイパスを設けることとなった。

事業予定地内には周知の西山A遺跡・西山B遺跡・庄屋田遺跡の3遺跡があり、それらの取り扱いについて三重県県土整備部より三重県教育委員会を通して三重県埋蔵文化財センターに連絡があり、平成13年3月7~8日に調査第一課技師新名強（役職は当時）を担当者として試掘調査を行なった。

調査は西山A遺跡に3ヶ所、西山B遺跡に9ヶ所、庄屋田遺跡に11ヶ所の試掘坑を設定して行なわれた。その結果西山A・西山B遺跡の事業地内では遺構・遺物は確認できなかったが、庄屋田遺跡の1,000m²について遺構が存在するものと判断。これを受けてその後関係部局と協議を重ねた結果、平成14年度事業予定地内の700m²については発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

2 調査の経過

（1）調査経過概要

調査の設備準備、現地作業員雇用や安全管理面の作業は民間発掘会社に委託することとなり、平成14年6月6日に入札を実施。その結果（株）イビゾクが落札し、6月10日に契約を締結した。

調査区の現況は水田で、耕作土と水田の床土等を重機で除去し、人力により包含層の掘削と遺構の検出、掘削を行なった。その際の現地調査作業では、梅雨から夏という気象条件の悪い期間にもかかわらず以下の方々に大変お世話になりました。ここに御名を記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）

鈴木愛式、松島長蔵、山尾和生、山下信一、長谷川勝也、平尾隆一、櫻谷和子、前川一郎、浅田隆、

武田行生、橋本四郎、田中文男、普尾朝美、植谷修、田中光蔵、日置豊蔵、大森文雄、五明正、日置公人

（2）日誌抄

調査の経過に関しては以下の通りである。

2002年

6月14日 現地協議。

6月25日 表土除去開始予定だったが、雨で中止。

6月26日 またも雨で中止。

7月 1日 表土除去開始。

7月 4日 包含層掘削開始。

7月 5日 遺構検出、掘削開始。

7月10日 台風5号接近のため作業中止。

7月12日 調査区東壁土層断面図作成。

7月15日 SK1の掘削。

7月16日 未明の台風7号にもめげず作業再開。

7月17日 雨のため作業中止。

7月18日 SK2の掘削。

7月22日 SK3の掘削。

7月23日 SK4の掘削。ピットより石器出土。

下層存在の可能性に一同期待（不安）

7月26日 全景写真撮影。

7月29日 遺構実測の準備。実測開始（徳積技師の応援あり）。

7月30日 遺構実測終了（中川主事の応援あり）。

7月31日 下層確認。下層遺構はなかった。

8月 1日 現場撤収。

（3）文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる関係法令の諸通知は、以下により行なっている。

・三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて）

平成13年9月25日付け教ス生第952号（県知事通知）

・文化財保護法第58条の2第1項（文化庁長官あて）

平成14年6月21日付け教理第85号（県教育長通知）

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）

平成14年8月19日付け教ス生第12—6—2号
(県教育長通知)

3 調査の方法

(1) 地区割

調査区内における地区割は4m方眼で設定しており、西から東へアルファベットを、北から南へ数字を与え、各北西角をグリッド名称とした。なおこの地区設定は任意のものであり、国土座標とは合致しない。

(2) 遺構カード・遺構略測図

三重県では遺構カードを作成している。これは前述の地区毎に作成するもので、遺構検出後、掘削するまでに記入し、遺構の重複関係、埋土の色調・状態などを明示している。遺構番号については、土坑などは遺跡全体の通し番号とし、ピットについては地区毎の通し番号をつけることとした。またこの遺構カードを基にして縮尺100分の1の略測図を作成した。

(3) 写真撮影

遺構の写真撮影は原則として4×5判・6×9判（モノクロ・カラーポジ）を、補助的に35ミリカメラを使用した。使用したカメラは、ウイスターフィールド、ニコンFM2である。使用したフィルムはフジNEOPANACROS100・120・135、フジPR OVIA100・120・135である。

遺物の写真撮影は4×5判（モノクロ）で撮影した。使用したカメラはTOYO-VIEW G IIである。使用したフィルムはフジNEOPANACROS100である。

(4) 遺構実測

遺構実測図・土層断面図については縮尺20分の1手書き実測を行なった。遺構実測図の基準点は国土座標に基づいている。また各遺構の詳細な実測図については縮尺10分の1手書き実測を行なった。

(小林俊之)



図1 調査区位置図(1:5,000) [■は試掘坑]

II 位置と環境

1 地理的環境

美杉村は南北に細長い三重県のほぼ中央西部に位置している。紀伊山地の北東端にあたり、東南を高見山系、西は室生火山群、北西は布引山脈の山々に囲まれ、村内の8割以上を山林が占める山村である。古代から大和と伊勢を結ぶルートとして主要な位置を占めていたと考えられる。

美杉村は、雲出川及び支流の八手保川がほぼ南北に流れしており、両岸に狭い谷底平野を形成している。庄屋田遺跡（1）は、雲出川左岸の標高150mほどの河岸段丘上に位置し、行政的には三重県一志郡美杉村八知字庄屋田に位置する。

2 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は美杉地域からまだ発見されていないので、旧石器時代に原始人が生活していたとは現段階では考えられない。

雲出川流域は伊勢と大和・伊賀を結ぶ文化交流のルートの一つにあたり、古くからの遺跡が分布する。縄文時代では、八知の東川遺跡（2）大洞山遺跡（3）から早期縄文式土器片が発見されている。上多気の多気北畠氏遺跡土井沖地区（4）から後期の竪穴住居が検出され、小形注口土器や深鉢等が出土している。また、青山町との町村境の布引開拓地遺跡（5）では石匙・石鎌が出土している。このように、縄文時代早期頃には、人間の活動が開始されたと考えられる。

弥生時代では、美杉村の遺跡からは前期のものは下之川富田遺跡（6）で発見されているのみで、ほとんどは中期及びそれ以降のものである。君ヶ野遺跡（7）・南瀬古遺跡（8）・老ヶ野遺跡（9）等から弥生時代の甕、土器片、石器類が出土している。このように、人間は雲出川およびその支流近くに定住し、集落を拡大していくのである。

古墳時代では、大洞山遺跡・君ヶ野遺跡・南瀬古遺跡は弥生・古墳にまたがる遺跡で、当該時期

の土器が多数出土している。また、下之川の下之川古墳（10）の副葬品として、須恵器・土師器などが確認されている。

奈良・平安時代の遺跡の報告例も少ないが、八知の東川遺跡では奈良時代の竪穴住居跡が確認されている。

中世前期において、下多気の漆絆塚群（11）からは土師器・山茶碗・常滑焼・青白磁・経筒（土師質・瓦質・陶質・銅製）・銅鏡・鉄劍・小刀・古錢等が出土している。このように金銅製や瓦質土器・陶器の経筒、あるいは銅鏡・貿易陶磁器などの優良な遺物が確認されており、当該時期の当地近隣が境界的な場として認識されていたことを物語っている。

中世後期になると、北畠氏が多氣（12）に本拠を構える。これに関連して、多くの遺跡が確認できるようになる。また、八知には、青山町と白山町との境界近くに矢鉢城（13）が築城されている。

美杉地域内には現在多数の地名がある。美杉地域が文献に現れるのは、主に北畠国司家の勃興からである。「八知」の地名も中世のころからいろいろな史料に見られるようになる。

鎌倉時代延祐元年（1239）の地蔵菩薩像胎内奉納物（奈良県大宇陀町大藏寺蔵）に「八智郷造立仏所僧長信庵所三条高倉 延祐元年九月□日」とあり、応永12年（1405）の嬉野町上小川の宇比神社の棟札銘文にも「八智」とみえ、同社の造営にあたった大工に八智之掲部懸原之光行とあり、八智掃部太郎・同二郎の名も記されている。また、八知宇宮越の仲山神社（14）にある大洞石製の水船（手洗石）の台に「永享五年 三月五日 八智郷 金生大明神 水船也 願主道球」とあり、室町初期までの表記は「八智」である。「八智」は北畠氏の本拠多気の背後にあたり、北畠の守力として知られた大和宇陀郡の沢氏の伊勢における所領で北畠家から給与されていた。永正8年（1511）10月22日付の北畠具方書下によれば「一、八知九名之内 東川八郎兵衛被放御扶持并寺庵又百姓等、御扶持仁不可召置之、御權門勢家同前事」とあり、沢源四郎は

北畠具方より八知九名のうち東川八郎兵衛を扶持人から召放つことを命じられている。東川八郎兵衛は八知の土着の有力名主層か地侍層であったとみなされる。

北畠氏滅亡後の八知の状況は詳らかではないが、

慶長13年(1608)以降津藩領となる。明治22年町村制施行により、竹原村・八幡村・多気村・伊勢地村・太郎生村・八知村・下之川村が成立、昭和30年3月、七カ村は合併して美杉村となった。

(辻本泰宏)

〔註〕

①竹田憲治「東川遺跡」(『六地蔵A遺跡・六地蔵B遺跡・高塚穴庭・東川遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年)。

②伊藤裕伸「多気遺跡群発掘調査報告書」(三重県埋蔵文化財センター 1993年)。

③森川板男「布引開拓地遺跡試掘調査報告書」(青山町教育委員会 1974年)。

④伊藤裕伸「下之川富田」(三重県埋蔵文化財センター 1998年)。

⑤稻生進一「考古編」(『美杉村史』上巻 1981年)。

⑥註④と同じ。

⑦稻生進一「下之川古墳」(『美杉村史』(美杉村教育委員会 1985年))。

⑧註①と同じ。

⑨小玉道明「漆絆塗器とその埋納品」(『美杉村史』上巻 1981年)。

⑩野田精一「一志郡神社史」(『一志郡史』下巻 1955年)。

⑪太田古朴・森田利吉「文化財編」(『美杉村史』 1981年)。

⑫「沢氏古文書」(『松阪市史』第三巻史料篇所収 1980年)。

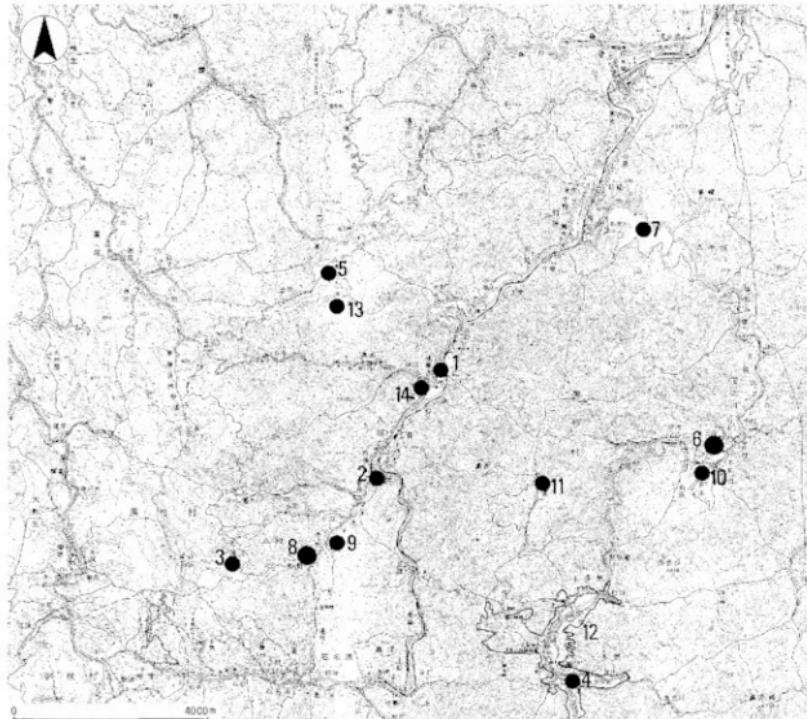


図2 遺跡位置図(1:100,000)【国土地理院「二本木」「名張」1:50,000より作成】

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万1地形図を複製したものである。(承認番号 平15部復、第269号)

III 調査の成果～層位と遺構～

1 基本層序

調査区土層断面図は調査区の東西南北各壁で作成した。調査開始前にU字溝が設置されており、第1層はその際の盛土である。部分的にはU字溝設置前の水田時耕作土が残るが、分層はしなかった。第2層はU字溝設置以前の水田時床土になる。第3層は褐色砂質土・灰色砂質土で、少量の遺物を含む遺物包含層である。第4層は黒褐色砂質土で、調査区南東部のみに存在する土であり、調査区南東部のみこの面で遺構が検出できた。第5層は黄色砂質土で、地山である。調査区南東部以外はこの面を遺構検出面とした。

2 遺構

遺構の多くはピットであり、この他4基の土坑が検出された。以下で各遺構の詳細について触れたい。

S K 1

調査区中央部b 7～b 8区に位置する土坑で、1.7m×3.4mの楕円形を呈する。深さは0.73mで、埋土はオーリープ褐色砂質土の單一層である。出土遺物は土師器片1点のみであるため断定はできないが、SK 2との埋土の共通性から古墳時代の遺構の可能性が考えられる。

S K 2

b 11区で確認した土坑である。調査区の西端で検出したため東西幅は不明だが、南北1.0m×東西

0.8m以上、深さは0.75mある。埋土はオーリープ褐色砂質土の單一層で、底より約8cm上の地点で古墳時代の土師器甕が逆位で出土している。出土遺物から古墳時代中期の遺構と考えられる。

S K 3

d 7～d 8区で確認した土坑である。径2.1mの円形の土坑で、深さは北側で0.1m、南側で0.35mであった。埋土はSK 1・SK 2と同様、オーリープ褐色砂質土の單一層である。出土遺物は土師器の細片のみであるため断定はできないが、埋土の状況から古墳時代の遺構の可能性が考えられる。

S K 4

b・c 12～b・c 13区で検出した土坑である。5.1m×3.8mの長方形を呈し、深さは約0.1mである。

当初、堅穴遺構を想定し掘削したが、その埋土は黄色砂質土と灰色土が混じるものでしまりも悪いため、時代としてはごく最近のもの可能性が高い。そのため堅穴遺構の可能性は考えにくく、SKとした。

出土遺物には石器があるが、混入と考えられる。ピット

調査区各地に存在するが、ほとんどが遺物の出土しない遺構であり、時代等についても不明である。d 4～d 5区あたりで南北に並ぶものもあるが、方向的にズレが生じ、間隔も揃わないため、建物や柱列にはしなかった。

(小林俊之)

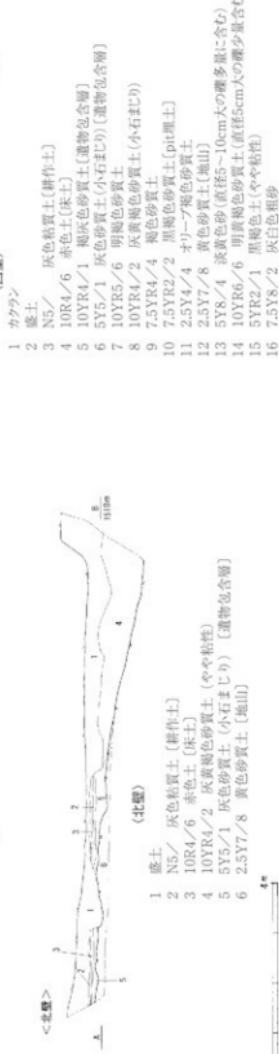
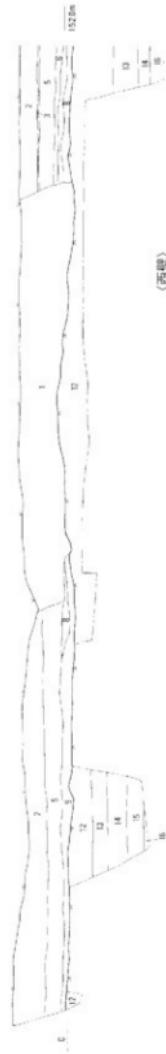
遺構番号	グリッド	性 格	規 模 (単位:m)	時 期	特記事項
SK 1	b 7	土 坑	1.7×3.4×(0.25~0.73)	古墳時代中期?	埋土一層
SK 2	a 10~b 10、 a 11~b 11	土 坑	1.0×0.8×(0.51~0.75)	古墳時代中期	埋土一層、 古墳時代土器
SK 3	d 7~d 8	土 坑	2.1×2.1×(0.1~0.35)	不明	
SK 4	b 12~c 12、 b 13~c 13	土 坑	5.1×3.8×(0.7~0.17)	不明	石器出土、 擾乱か?

表1 遺構一覧表

<西壁>



1051m



1053m

図3 調査区西壁・北壁土層断面図 (1 : 100)

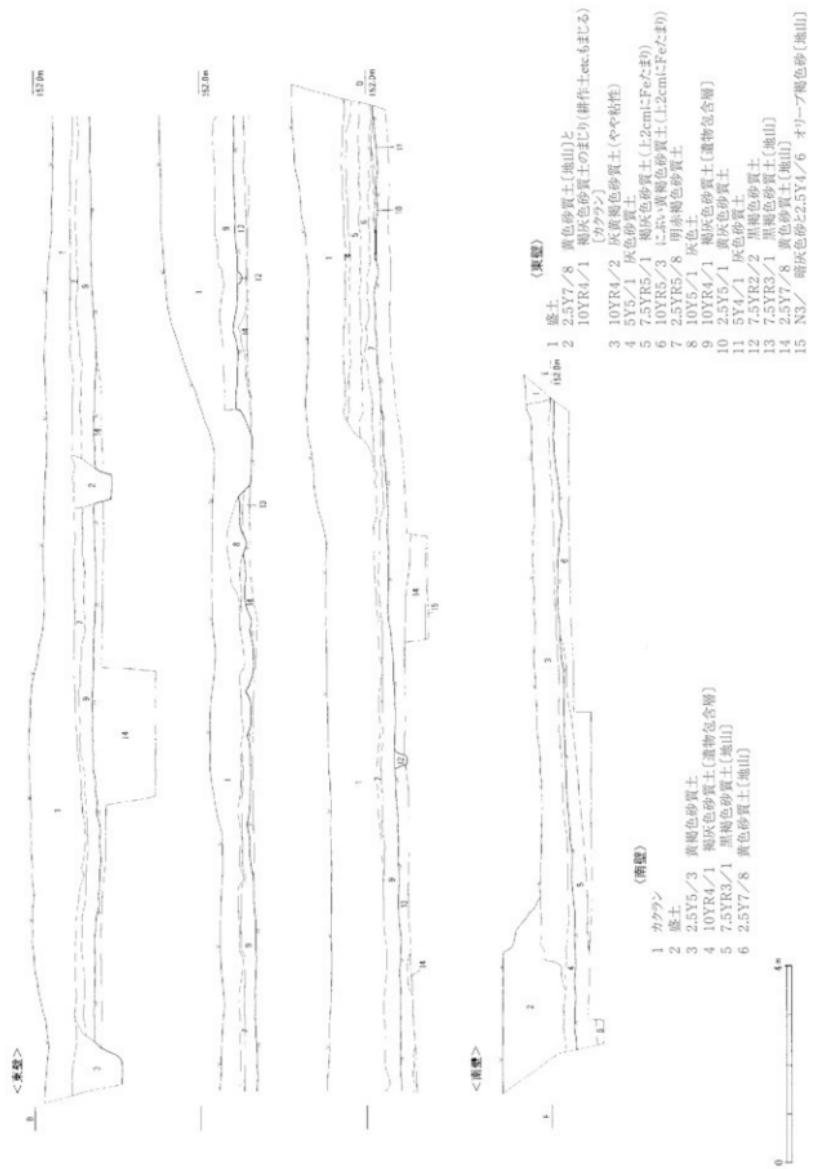


図4 調査区東壁・南壁土層断面図 (1 : 100)

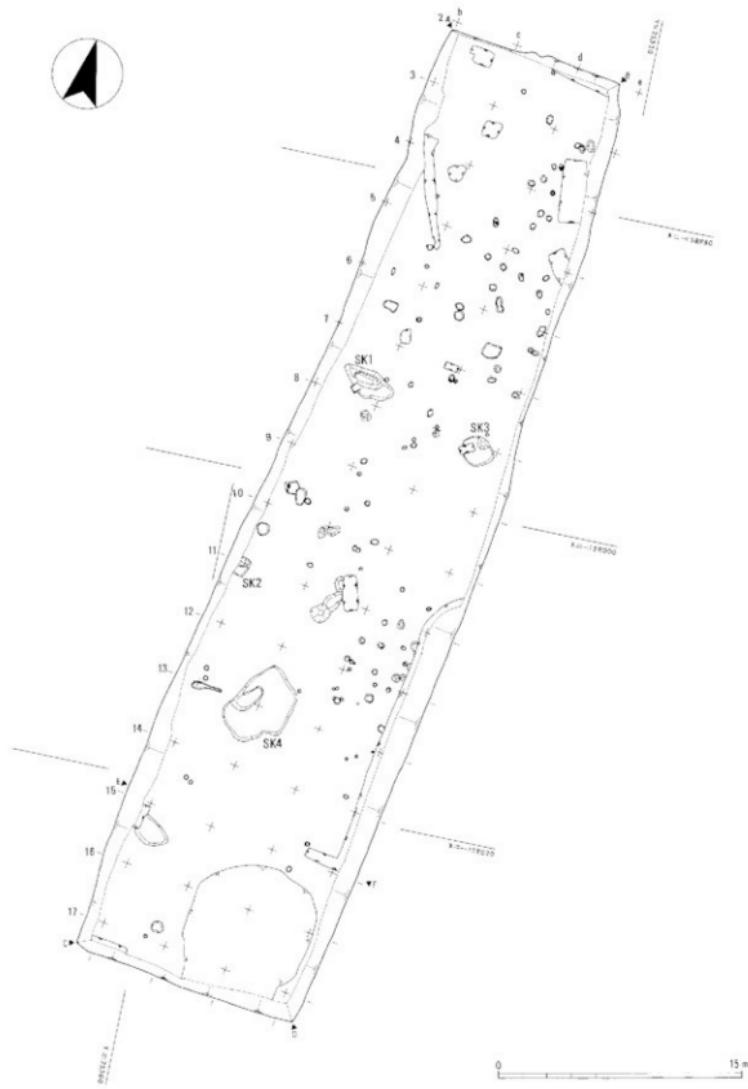


図5 遺構平面図 (1 : 300)

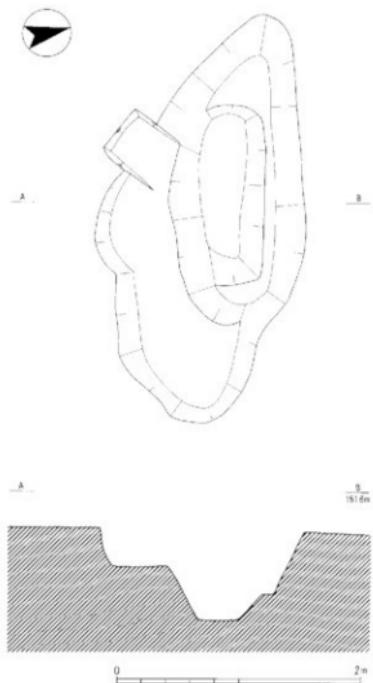


図6 SK1平面図・断面図 (1 : 40)

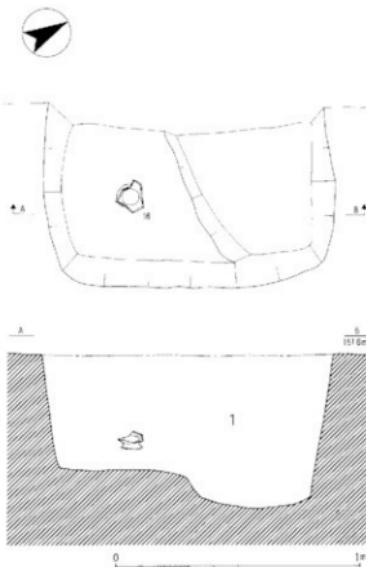


図7 SK2平面図・断面図 (1 : 20)

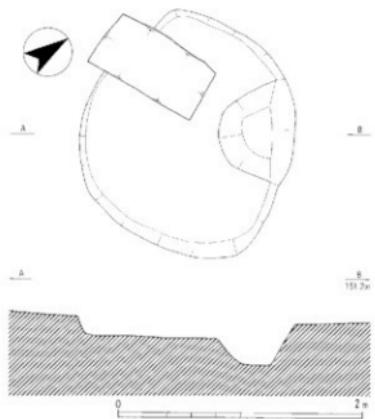


図8 SK3平面図・断面図 (1 : 40)

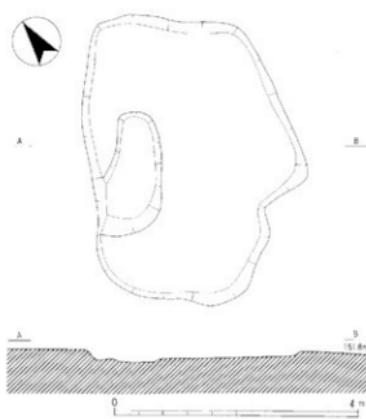


図9 SK4平面図・断面図 (1 : 80)

IV 調査の成果～出土遺物～

今回の調査で出土した遺物はコンテナバット10箱（洗浄後）である。遺構からの出土はほとんどなく、大部分が包含層出土の遺物である。ここでは出土位置は関係なく時代順に記述することとする。

縄文時代の遺物

1～8は縄文土器である。

1～2はいずれも器形不明。外面には縄文が施される。

3は深鉢で、口縁部にLRの縄文を施し、その後、

沈線を2条施す。4も深鉢だが、体部片である。内面にはベンガラが見られる（図中の・部分）。元住吉山II式のもので後期後葉のものである。^④

5は深鉢で、口縁部に凹線を施す。割れにより何条の凹線であるかは不明。6も深鉢で、凹線が見られる。これらはいわゆる凹線文系土器で、元住吉山II式～宮滝式と考えられ、後期後葉のものである。7～8は無文。8は内面が炭化している。

9は石錐でサヌカイト製。10はリボン錐と呼ば



図10 出土遺物実測図①【縄文時代】 (1:4、9・10は2:3)

れるもので、両尖匕首とも呼ばれる。サスカイト製である。11～13は磨石で、12は片面に右上から左下にかかる刻みがある。13は約半分の残存。工事範囲中の地面にて表探したものである。

弥生時代の遺物

14は弥生土器広口壺で、口縁部にはクシによる刺突文、頸部にはハケを施す。伊勢IV～I様式か。

15は弥生土器壺の頸部で、突帯貼付後に刺突を施す。伊勢III～IV様式か。

古墳時代の遺物

16は土師器壺の口縁部。伊勢地方ではあまり見ない。古墳時代中期のものであろうと考えられる。

17は土師器壺の底部である。18は土師器壺の口縁部で、いわゆる宇田型台付壺である。^④19は土師器高杯の脚部である。外面にはミガキを施す。20～23は須恵器である。20は杯蓋、21～22は須恵器杯身である。23は器台で、波状文が見られる。これらはおおむね田辯編年MT15～TK10型式に相当する。

奈良時代の遺物

24は土師器壺の口縁部で、奈良時代後期のものである。

平安時代の遺物

25～27は土師器壺の口縁部で、いずれも平安時代後期のものである。

鎌倉時代の遺物

28～31は陶器碗で、いわゆる山茶碗である。

28・29は口縁部で、28は藤澤編年尾張産第5型式、29は尾張産第6型式か。30・31は底部で、30は尾張産第5型式、31は第6型式である。

32～37は瓦器碗で、すべて伊賀型のものである。

32～34は山田編年II～IV型式、35～37はIII～I型式に相当する。

38は白磁碗の底部である。大宰府跡の分類では白磁IV類に相当すると思われる。

時期不明の遺物

39～42は土鍤である。すべて土師質のもので、円柱形を呈する。海岸沿いの遺跡である津市安濃津

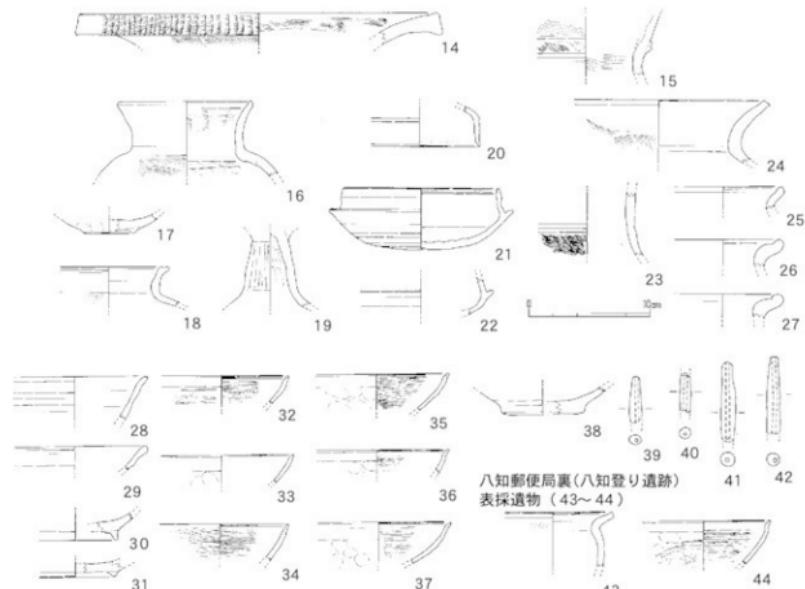


図11 出土遺物実測図②(弥生時代以降) (1:4)

遺跡群や伊勢市高ノ御前遺跡・有滝遺跡出土のものにはやや太めの円柱形のものや球形のものが見られるが、ここでは見られなかった。このことが海と川による使用場所の違いなのかどうかはわからない。

八知郵便局裏表探遺物

43・44は八知郵便局裏の耕作地で表探された遺物である。採集された大森文雄氏に感謝の意を表

する。なお、この地点は「八知登り遺跡」として登録されている。

43は土師器甕の口縁部で、飛鳥～奈良時代のものである。44は瓦器椀の口縁部で、山田編年Ⅲ－1型式に相当する。

(小林俊之)

〔注〕

①以下縄文土器は下記の文献に掲載された。

泉拓良「縄文土器様式」（『縄文土器大観』4 後期・晚期・続編文、小学館、1989年）。

丹羽佑一「四縄文系土器様式」（『縄文土器大観』4 後期・晚期・続編文、小学館、1989年）。

森川幸雄「後期中葉から晚期初頭の在地形の土器」（『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1995年）。

②新田剛氏（鈴鹿市考古博物館）のご教示による。

③上村安生「伊勢・伊賀」「弥生土器の様式と編年」東海編（木耳社、2001年）。

④赤坂次郎「土器・土器群の形成」（『圓周遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、1990年）。

⑤「陶邑古窯址群！」（平安学園考古学クラブ、1966年）田辺順三「須恵器大成」（角川書店、1981年）。

⑥森川常厚「伊勢・志摩・斎宮」（『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会、1996年）。

⑦新田洋「平安時代～中世における煮炊用具—『伊勢型』網一に関する若干の覚書」（『三重考古学研究1』三重考古学講話会、1985年）。

⑧藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

⑨山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究』II、日本中世土器研究会、1986年）。

⑩山本信夫「大宰府豪坊跡X V-1陶磁器分類編一」（太宰府市教育委員会、2000年）。

⑪伊藤裕介「安濃津」（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。

⑫日榮智子「高ノ御前遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。

⑬伊藤裕介・小林俊之「有滝遺跡」（三重県埋蔵文化財センター、2001年）。

⑭『美杉村遺跡分布地図』（美杉村教育委員会、1996年）。

報告番号	実測番号	器種	グリッド	出土位置	法量 (cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	006-06		b14	包含層	不明	縄文、条痕	やや粗	やや良	にぶい赤褐色5YR5/3		
2	006-03		d5	包含層	不明	ナデ、縄文	やや粗	やや良	淡黄2.5Y8/3, 断面: 黒N2/		
3	003-04	深鉢	d13	包含層	不明	ミガキ、縄文	やや粗	並	にぶい黄褐色10YR6/3 内面にぶい黄褐色5Y6/3	口縁部小片	
4	006-01	深鉢	a16	包含層	不明	ナデ、ケズリ	やや粗	やや良	外面にぶい黄褐色10YR6/3 内面: 黄褐色NS/3		内面にベンガラ
5	006-04	深鉢	c9	包含層	不明	ナデ	やや粗	やや良	淡黄2.5Y8/3 断面: 黄褐色NS/3	口縁部小片	
6	006-02	深鉢	d6	包含層	不明	ナデ、四線	やや粗	やや良	淡黄2.5Y8/3 断面: 黒N2/		
7	006-05		b6	包含層	不明	ナデ	やや粗	やや良	灰N5/ 暗灰N3/		
8	003-03		d13	包含層	不明	ナデ、ヨコナデ	やや粗	並	外面にぶい橙7.5YR6/4 内面: 黒10YR2/1	口縁部小片	

表2 縄文土器観察表

報告番号	実測番号	器種	グリッド	出土位置	石材	遺存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
9	009-01	石鏟	d13	p1	サヌカイト		2.07	1.46	0.36	0.8	
10	009-02	石鏟	b13	SK4	サヌカイト		2.55	3.23	0.52	4.4	
11	007-01	磨石	a16	包含層		完存	縦11.4	横10.9	厚5.8		
12	008-02	磨石		表掘削		完存	縦10.1	横8.4	厚4		
13	008-01	磨石		表探			縦10.6	横11			

表3 石器観察表

報告番号	実測番号	種類	器種	グリッド	出土位置	法量	量	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考	
14	004-01	飾生土器	壺	e15	包含層	29.2		ヨコナデ、ハゲメ、 クシによる刺突	やや粗	やや良	浅黄褐色10YR8/3		口縁部1/6	
15	006-07	飾生土器	壺	e16	包含層	不明		ハケ、ナデ、貼り付 け、削除	やや粗	やや良	にぶい黄褐色10YR7/3		頭部小片	
16	001-01	土器部	壺	a11	SK2	10.8		オサエ、ナデ、 ヨコナデ、ハゲメ	やや粗	並	外側: 淡7.5YR7/6 内面: 明黄褐色10YR7/6		口縁部5/6	
17	005-02	土器部	壺	b15	包含層	不明		ナデ、オサエ	粗	やや良	内面にぶい橙7.5YR7/4		底径1/4	
18	004-05	土器部	壺		表土掘削	不明		ナデ、ヨコナデ、 ハゲメ	やや粗	やや良	外側: 黄褐色7.5YR8/4		口縁部小片 頭部5/4	
19	004-02	土器部	高杯	d4	丸皿	不明		ヨコナデ、ミガキ 剥り模	やや粗	やや良	浅黄褐色7.5YR8/3 削除: 剥灰NS/3		脚部小片	
20	005-04	須恵器	杯蓋	c16	包含層	不明		クロロナデ	やや粗	粗	NS/3, 頬灰NS/3		口縁部小片	
21	004-03	須恵器	杯身		表探	12.6	5.1	受部彫15	やや良	やや良	白BN7/		口縁部1/9	
22	005-05	須恵器	杯身	d10	包含層	不明		クロロナデ	やや良	粗	RN6/5		受部小片	
23	005-06	須恵器	蓋台	d10	包含層	不明		クロロナデ、波状文	やや良	粗	白(N7), 橙N6/		脚部小片	
24	005-01	土器部	壺	b8	包含層	不明		ヨコナデ、ハゲメ	やや粗	やや良	外側: 浅黄褐色10YR8/4		口縁部小片	
25	005-03	土器部	壺	d10	包含層	不明		ヨコナデ	やや粗	やや良	栗褐色5Y4/1		口縁部小片	
26	004-06	土器部	壺	b9	包含層	不明		ヨコナデ	やや粗	やや良	外側: 浅黄褐色5Y7/3 内面: 剥灰10YR5/1		口縁部小片	
27	002-08	土器部	壺	d9	包含層	不明		ヨコナデ	やや粗	並	にぶい黄褐色10YR6/2		口縁部小片	
28	002-03	陶器	楕	b16	包含層	不明		不明	粗	良	灰黄2.5Y7/2		口縁部小片	
29	003-01	陶器	楕	d12	包含層	不明		クロロナデ	やや粗	粗	白(N7)		山茶碗	
30	002-04	陶器	楕	c16	包含層	不明		クロロナデ、 貼付後ヨコナデ	やや粗	良	にぶい2.5Y6/3		底部小片 山茶碗	
31	002-07	陶器	楕	d9	包含層	不明		不明	クロロナデ、 貼付後ヨコナデ	やや粗	良	白BN5/1		底部小片 山茶碗
32	001-05	瓦器	楕	d9	包含層	不明		ヨコナデ、ミガキ	密	良	地白: 淡7.5YR8/3 脚: 黄褐色NS/3		口縁部小片	
33	002-06	瓦器	楕	d9	包含層	不明		不明	オサエ、ヨコナデ	密	浅黄褐色10YR8/4		口縁部小片 いぶしなし	
34	001-06	瓦器	楕	d9	包含層	不明		ヨコナデ、ミガキ	密	良	RNS5/4		口縁部小片	
35	002-01	瓦器	楕	c16	包含層	不明		オサエ、ヨコナデ、 ミガキ	密	良	灰黄2.5Y7/2		口縁部小片 いぶしなし	
36	003-02	瓦器	楕	d13	包含層	不明		オサエ、ヨコナデ、 ミガキ	密	並	淡黄2.5Y8/3		口縁部小片	
37	002-02	瓦器	楕	c16	包含層	不明		オサエ、ヨコナデ、 ミガキ	密	良	淡黄2.5Y7/2		口縁部小片 いぶしなし	
38	002-05	磁器	楕	c9	包含層	不明	高台径6.7	ロクロナデ、施釉	密	良	地白: 白BN5/1 脚: 黄褐色5Y7/1		高台部1/4 白磁	
39	005-08	土製品	土師	d11	包含層	残存長3.85	幅1.0	重2.81g	やや粗	やや良	白(12.5Y2.7)脚: 黑N3/			
40	003-06	土製品	土師	d13	包含層	残存長3.35	幅1.0	重2.29g	密	良	白(12.5Y2.7)脚: 黑Y8/4-6			
41	005-07	土製品	土師	d12	包含層	残存長6.65	幅1.2	重5.68g	やや粗	やや良	白(12.5Y2.7)脚: 黑Y8/6-6			
42	003-05	土製品	土師	d13	包含層	残存長6.4	幅1.1	重5.78g	密	良	白(12.5Y2.7)脚: 黑Y8/6-6			
43	004-04	土器部	壺		八咫 御使局表	表探	不明		ナデ、ヨコナデ、 ハゲ	やや粗	やや良	ナデ: 2.5Y8/3 脚: 黑Y5/1-4		口縁部小片 八咫登り直跡
44	001-04	瓦器	楕		八咫 御使局表	表探	不明		オサエ、ヨコナデ、 ミガキ	密	良	地白: 黄褐色5Y8/0 脚: 黑Y5/1-4		口縁部小片 八咫登り直跡

表4 出土遺物観察表

V 調査のまとめ

1 中世前期の土器構成

美杉村は山茶椀・瓦器分布圏の境界にあたり、これまでも注目されてきた。今回の調査でも中世前期の出土遺物のカウントを行なっている。ここでは全体を口縁部12分割・底部12分割による計測、山茶椀・瓦器については他遺跡との比較も可能なようになし、その結果は表5に示した。

まず全体を見て、山茶椀・瓦器以外には土師器皿が見られる程度で、青磁・白磁・施釉陶器（古瀬戸か）が破片1点づつ見られただけであった。

次に山茶椀・瓦器のみの計測値を見る。破片数による計測だが、庄屋田遺跡内では破片数106のうち山茶椀22(20.8%)・瓦器84(79.2%)であった。これは過去に八知全体の構成比率を提示した皇學館大學考古学研究会による比率（山茶椀22.5%・瓦器77.5%）には近い。

口縁部12分割による計測値では山茶椀10/12(30.3%)・瓦器23/12(69.7%)となり、底部12分割による計測値では山茶椀2/12(20%)・瓦器8/12(80%)となる。

底部の計測では対象量が少ないため一概には言えないが、破片数と底部12分割による計測比率がほぼ同じになるという現象が見られた。筆者の力不足もあるため、このことは1つのデータとして提示するに留めておきたい。

さてこれらに見える比率であるが、他の遺跡や美杉村内の各地区と比較してみたのが図12である。おおむね伊勢湾に近い地区に山茶椀が、旧伊賀国に近い地区には瓦器がそれぞれ多く分布している状況がわかる。この他、伊勢本街道沿いに瓦器が多く分布することも見える。これらの分布状況はおよそ現在の各地区的生活文化圏と一致するという指摘もあり、非常に興味深い。

現在、調査区南約150mには伊賀へ至る桜峠に登る道がある。今回の調査での瓦器優勢の状況は桜峠の存在が大きいと考えられ、峠の中世時の存在を

示唆するものである。

2 庄屋田遺跡と八知

今回の調査では特筆すべき遺構には恵まれなかつたため、遺跡の縁辺部であると考えられる。しかし包含層から数点の遺物が出土している。

包含層出土の遺物は、大きくわけて縄文時代後期、古墳時代中期・中世前期（鎌倉時代）の3つの時期のものがある。

このことは近辺に各時代の遺跡が存在することを示唆している。ここでは各時代の周辺概況について見てみたい。

縄文時代 周辺域では東川遺跡で早期・後期が確認されている。そこから老ヶ野川を遡っていくと大洞山遺跡でも早期・後期が確認されている。庄屋田遺跡より下流では倉元遺跡で縄文土器が確認されている。

これらを見していくと、大洞山遺跡から老ヶ野川の辺りで早期の集落が営まれているようである。また後期についても、老ヶ野川から雲出川の部分で多くの遺跡が展開している。特に老ヶ野川流域（東川遺跡以南）は縄文時代の遺跡が多く存在する可能性がある。今後はこの地域の調査に注意を払うべきである。

古墳時代 八知での古墳時代の遺跡はほとんどなく、それは村内にまで広げても数は少ない。今回の調査では中期の遺構を確認したため、集落も当然形成されている、と考えられる。また須恵器の器台の出土から調査区近辺に古墳が存在する可能性も指摘できよう。

中世前期 周辺部では多くの遺跡で瓦器・山茶椀が採集されている。遺跡数が増加するのは、県内各地と同じ状況であり、ここ八知においても例外ではない、と言える。

庄屋田遺跡に隣接する八知登り遺跡でも瓦器・山茶椀が多数採集されている。発掘調査された遺跡では東川遺跡、倉元遺跡があり、当遺跡と共に瓦器が

庄屋田遺跡中世前期土器構成表(12分割法)

		口縁部	口縁部計	底部	底部計
	実	未		実	未
土師器	小皿	0	11	11	0
	皿	0	14	14	0
	鍋	0	0	0	0
	不明	0	0	0	0
青磁	碗	0	1	1	0
	小皿	0	0	0	0
無釉陶器 (瀬戸)	鉢	0	1	1	0
施釉陶器	碗	0	0	0	0
無釉陶器 瀬戸	碗	0	0	0	0
瓦器	碗	7	16	23	5
	皿	0	0	0	3
山茶碗	碗	2	8	10	2
	皿	0	0	0	0
白磁	碗	0	0	0	3

※表内の数字はすべて○/12の分子を表す。

庄屋田遺跡山茶碗・瓦器構成表(破片数)

山茶碗	口縁部		体部		底部		合計
	実	未	実	未	実	未	
碗	2	10	0	0	2	8	22
皿	0	0	0	0	0	0	0
鉢	0	0	0	0	0	0	0
山茶碗合計	2	10	0	0	2	8	22
瓦器							
碗	7	18	0	54	3	2	84
皿	0	0	0	0	0	0	0
瓦器合計	7	18	0	54	3	2	84

山茶碗	破片数			合計
	口縁部	体部	底部	
山茶碗	12	10	0	22(20.8%)
部内%	32.43%	15.60%	0.00%	100%
瓦器	25	54	584(79.2%)	
部内%	67.57%	84.30%	100.00%	100%
合計	37	64	5	106

庄屋田遺跡山茶碗・瓦器構成表(12分割法)

山茶碗	口縁部		体部		底部		合計
	実	未	実	未	実	未	
碗	2	8	0	0	2	0	14
皿	0	0	0	0	0	0	0
鉢	0	0	0	0	0	0	0
山茶碗合計	2	8	0	0	2	0	14
瓦器							
碗	7	16	0	0	5	3	31
皿	0	0	0	0	0	0	0
瓦器合計	7	16	0	0	5	3	31

口縁部割合による比率

山茶碗
瓦器

12分割法

	口縁部	体部	底部
山茶碗	10	0	2
部内%	30.30%	0.00%	20.00%
瓦器	23	0	8
部内%	69.70%	0.00%	80.00%
合計	33	0	10

各部割合による比率

山茶碗
瓦器

優勢であることが判明している。多くの集落が展開し、瓦器という近畿系の椀形態が主流を占めている。この時期における八知と大和国とのつながりは既に指摘されており、伊賀を含めた関西地方との結びつきは強かったようである。桜峠の存在は大きかったと考えられる。

庄屋田遺跡の中心と性格 ここまで見たように、今回の調査では遺構には恵まれなかった。しかし、出土遺物から多くのことが考えられる。

前述したとおり、今回の調査区は遺跡の縁辺部と考えられる。では遺跡の中心はどこなのか。それは、

S K 2 が調査区西端にて検出した点、地形的に調査区と西侧の現集落とは約 1 m の高低差がある点、ということから、庄屋田遺跡の中心は調査区より西侧の箇所であると考えられる。包含層出土遺物の多くも西側から流れてきたものと考えるのがよさそうだ。

庄屋田遺跡と八知登り遺跡は桜峠のちょうど登り降り口にある。遺構面での構造は不明な点が多いこの 2 遺跡だが、伊賀へ向かう人を送り、伊賀から来る人を迎える。この 2 つの遺跡はそのような性格の集落であった、と考えられる。

(小林俊之)

【註】

- ①藤裕作「中世安濃津の交通路と物流」（『織豊期の政治構造』吉川弘文館、2000 年）。中世古志尚「中世土器の流通」（『美杉村の遺跡』皇學館大學考古学研究会、1995 年）。など
- ②伊野隆夫「食器計量の意義と方法」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集、1992 年）。
- ③他遺跡との比較のため、破片数を用いて作成している。
- ④石瀬誠人・小林俊之「美杉村☆遺跡ぶらり旅」（美杉ふるさと資料館展示パンフレット、2003 年）。
- ⑤石川隆郎・竹田憲治「東川遺跡」（『六地蔵 A 遺跡・六地蔵 B 遺跡・高冢宅一 東川遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994 年）。

- ⑥橋進一「考古編」（『美杉村史』上巻、1981 年）。
- ⑦平成 13 年度美杉村教育委員会調査（石瀬誠氏の御教示による）。

- ⑧註⑤文獻。
- ⑨第 II 章で述べたように奈良県宇陀郡大字陀寺町大藏寺の地蔵菩薩内の榜題裏書に「八智」と見える。当時は八知の寺院に納められ、後に寺院に移された、と考えられているが、その関係性を知るには非常に興味深い。（米山徳馬「大藏寺地蔵菩薩内の榜題と結縁者」（『史述と美術』215 号、1951 年）。

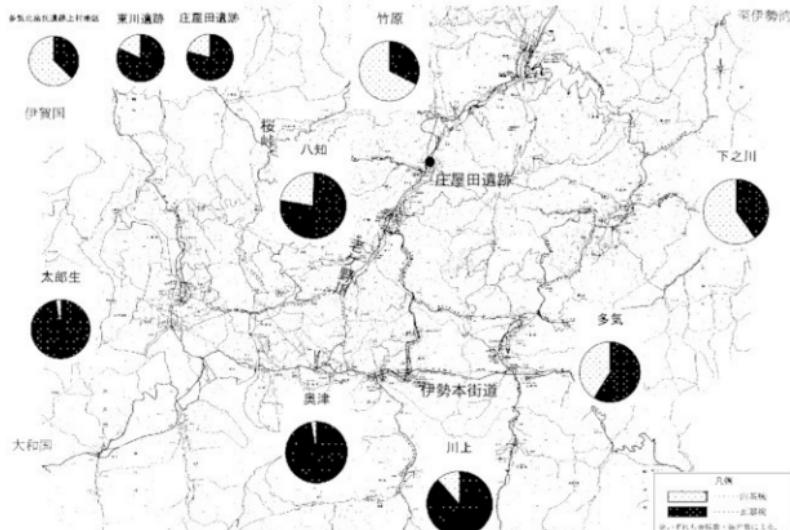


図 12 美杉村の山茶椀・瓦器の分布 (1 : 150,000) [『美杉村☆遺跡ぶらり旅』を一部改変]



調査区全景(北から)

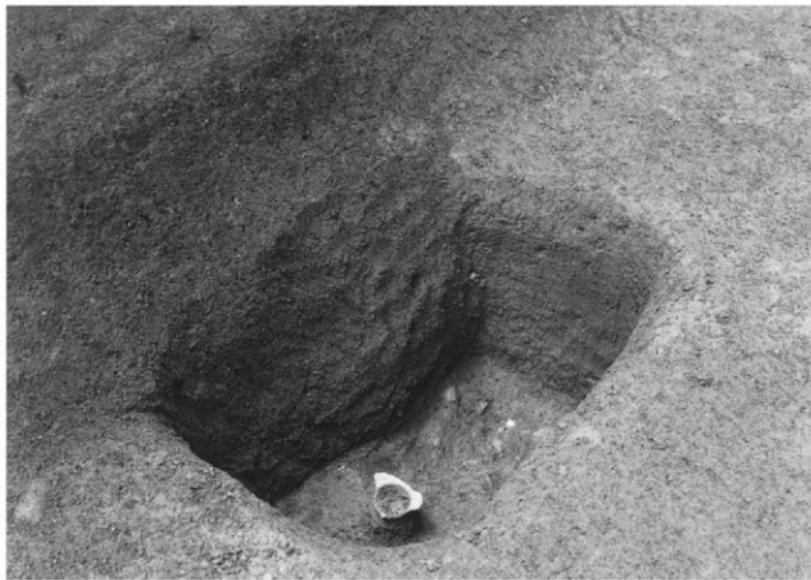


調査区全景(南から)

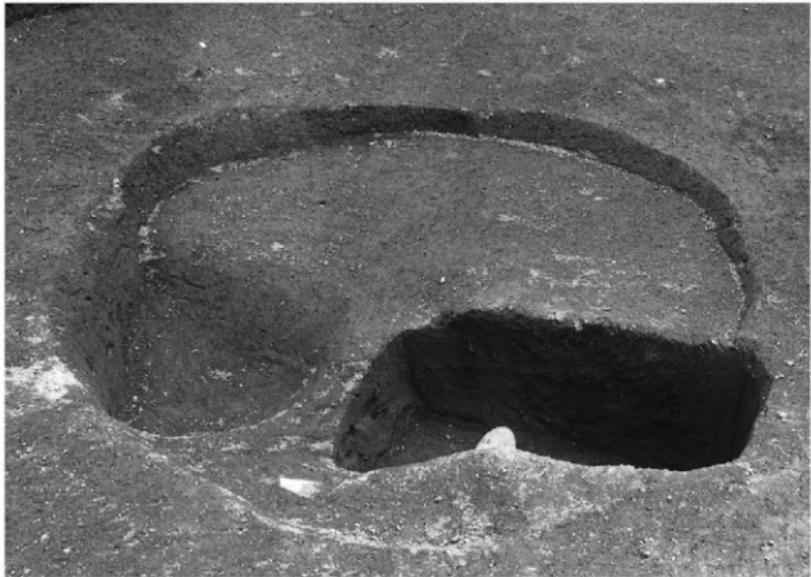
写真図版 2



SK 1 (東から)



SK 2 (南東から)



SK 3 (北西から)



SK 4 (北から)



11



12



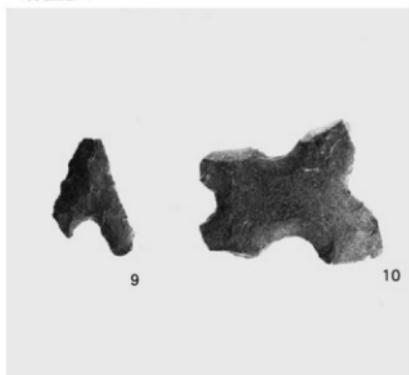
13

出土遺物①(磨石)



出土遺物 ② (縄文土器)

写真図版 6



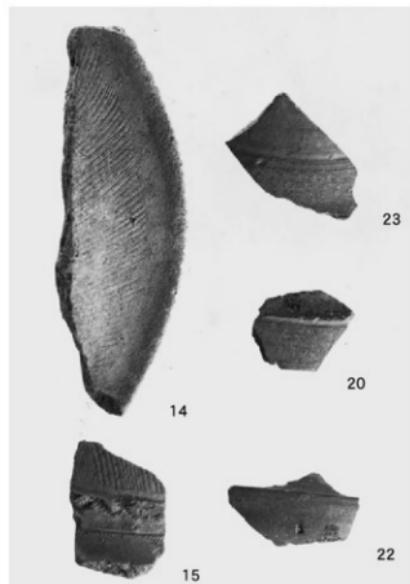
出土遺物 ③



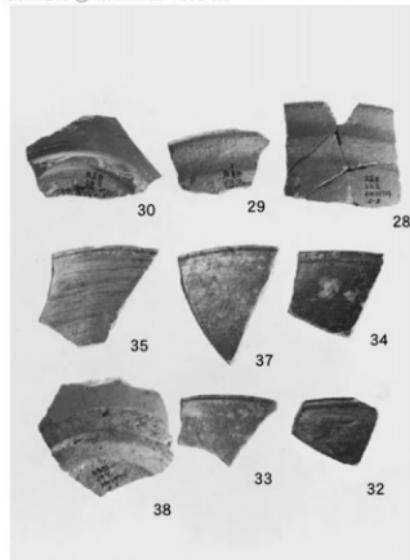
出土遺物 ⑤



出土遺物 ⑥



出土遺物 ④(弥生土器・須恵器)



出土遺物 ⑦(山茶椀・瓦器)

報告書抄録

ふりがな	しょうやだいせきはくつちょうさはうこく							
書名	庄屋田遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	248							
編著者名	辻本泰宏 小林俊之							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 市町村	東經 遺跡番号	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しょうやだいせき 庄屋田遺跡	いちしごんみすぎむら 一志郡美杉村 やちあざしょうやだ 八知字庄屋田	24406	56	34度 34分 00秒	136度 16分 40秒	20020625 ~ 20020801	700 m ²	平成14年度主要地 方道久居美杉線道 路改良工事(須賀 BP)
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構			主 な 遺 物		特記事項
庄屋田遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 鎌倉時代	土坑 ピット			石器 縄文土器 弥生土器 土師器 瓦器 陶器 磁器		

三重県埋蔵文化財調査報告248

庄屋田遺跡発掘調査報告

2004（平成16）年3月発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 東海印刷株式会社
